

## その 48

### そして、奈落に墜ちた、が



「舞台から降りたい」という連絡があったパートナーのプロデューサーとは 30 年前からの親しい付き合いで、私が「万葉集宣伝係」を自称して活動を始めた頃「万葉集なるものを一緒にやりたい」とアプローチしてきた。強力な相方が来てくれて内心嬉しかったが、それはおくびにも出さず答えた。

「やめた方がいいよ。万葉集は『本は売れない、客は入らない、視聴率も取れない』の『三ない集』。だから、ビジネスには向かない……でも、メチャ面白いよ」。

それを聞いて彼がしばし逡巡したのを見て、自分から「やめた方がいいよ」と言い出しながら、やっぱりやめるのかとガックリしていると、敵もさるもの、「メチャ面白い？ ……なら、一緒にやりましょう」。

ところが、その親切な忠告が 10 年後に効いてきたのか、それが今回の降板申し入れだった。直ちに慰留に努めたのだが、私の人徳のなさか、何より金力のなさを見限られたのか翻意ならず、舞台制作のパートナーを失った私は片翼を失い奈落に墜ちた。そして、奈落で考えに考え悩みに悩んだ末、やはり素人興行師 1 人では何もかもやることはできないと判断し、やむなく公演の中止という苦渋の決断をした。「東京で万葉の舞台を」という期待に胸を膨らました夢も、「公演初日、客席がガラガラ」という悪夢とともに吹き飛んで、例の諺の通り「大火傷する」羽目になったのだ。痛恨の極みだった。

その後始末は興行ならぬ苦行だった。もともと素人苦行師を見かねて惜しみなく力を貸してくれた人たち。その中には、ある特別招待の極秘作戦が順調に進んでいたのだが、それに陰ながら尽力してくれた人、そして、鳥取公演とほとんど同じ顔ぶれで東京公演を楽しみにしてくれていた役者さんたちに突然の中止とお詫びの連絡を入れることの辛かったこと。

なにより会場を予約してくれた公会堂からは、「受け入れられない。中止の理由が納得できない。パートナーとよりを戻すべきだ」と当初は突っぱねられ、「今後全国どこの劇場でも、あなたは 2 度と舞台はできなくなる」と厳しく警告された。このように「前科者」呼ばわりされたが、その後会場のキャンセル料なしという異例の便宜を図ってくれることになるなど、素人苦行師にとってはなんともありがたいことだった。

正月の年賀メール以来、まずは友人たちに予告チラシを送って先行予約のお願いをしたところ、ありがたいことにあっという間に 100 人を越えた。さらにありがたかったのが、公演中止のお詫びにたくさんの励ましの返信をもらったことだ。

「演劇の世界には私たちの伺い知れない魔物がいるのですね」。(そうなのです。舞台には、確かに「神様と

魔物」が同棲していました）。

「この貴重な体験、『幸か不幸か』分かりませんよ。（これから起きる 1 歩先を見事に見通していました）。

「山に登るより引き返す方が、勇気が要る」。（山男でラジオ深夜便の名アナウンサーは私が多分「死んだも同然」でいると思ったのだろう（確かにその通りだった）、2 人で、私の生前葬をやらないかと言う。タイトルは、「話下手アナウンサーと前科者プロデューサーのジョイント・ライブ生前葬祝い歌」。ありがたくもめでたい弔いである）。

そして、不覚にも目頭が熱くなったのが、半世紀も前から世話になっている先輩たちからかけられた言葉の数々。

昭和 40 年代、初めての地方局勤務で私の飛び跳ねた番組作りに、「どこまでも付き合うよ」と言ってくれた元アナウンサーは、現在は関西在住で闘病中にもかかわらず、今回も「這ってでも見に行く。最後まで付き合うよ」。

もう 1 人の先輩は、「この際予約を申し込んだ連中に声をかけて『観劇したつもりで』と寄付を頼んでみよう」。件の会場のキャンセル料まで気遣ってくれた。

ということで、舞台に、友人に、捨てる神あれば拾ってくれる神さまがいたのだ。それも、たくさん。失敗したからこそ手に入れることができた、成功に勝る極上の宝物だった。

ところが、である……この直後から、世界中のすべての舞台が暗転を始める。世の中私の並みの脚本より波乱万丈、「幸か不幸か」どころか、すべての舞台関係者にとつとんでもない不幸な事態が発出する。

公演中止という決断をしたほんの 1～2 週間後のこと。未曾有の災禍が進行していることが明らかになる。言わずと知れたコロナ禍である。公演の中止を決めてからしばらくして続々と舞台のみならず、結果的にはすべてのイベントが自粛を求められ、遂には東京 2020 も 1 年延期。さらには緊急事態宣言が発せられて、あらゆる活動がストップしてしまったことは記憶に新しいところだ。演劇博物館によると、この 1 年間で中止となった舞台公演は 800 以上とされている。そのおかげだろう、私たち「前科者」の公演中止は目立たなくなっただけでなく、すんでのところその大嵐に巻き込まれずにすんだのである。もしそのまま進行していたらリハや会場等のコロナ対策のための諸経費の高騰、何より入場率 50%以内規制では入場率 70%で収支トントンという計算だったからチケット完売でも赤字、何とか準備ができたとしても拳句の果ての中止、そして、イベント中止に対する補償もそれまで実績ゼロの個人興行は対象外等々考えると、素人興行師は木端微塵、個人年金の多くを失う羽目になっていた。プロのイベントが苦境に陥る中で、ド素人がその魔物の餌食にならずにすんだのは、天恵か、はたまた「悪運が強かった」のか。

天恵をもたらしてくれたとしたら、誰だろう、あの降板した元友人のパートナーである。舞台の魔物を前にして敵前逃亡ならぬ直前逃亡してくれたおかげで、私は命拾いをしたのである。いかにも劇的ではあるけれど、無理筋のエンディング。こんな安直な脚本は私でも書かないが、気まぐれなお芝居の神様の助け舟だったのだろう。いずれにしても元友人のありがたい突然の降板だったのである。

元友人と訣別してからすでに何年かが過ぎた。もう 1 度会って、「ありがとう。おかげで助かったよ」と笑ってお礼の盃を交わしたい気がなくもないが、「2 度と一緒にしたくない」というあの奈落に墜ちた時の思いが顔を出

すのは、自分の狭量さゆえだろう。

さて、甦りの歌集とも言われる「万葉集」企画。最初にして最後のチャンスだった夢の東京公演は、こんな時代だからこそ実現したかった。万葉集には、当時大勢の死者を出した疫病、鬼病かみのやまいについての記述と挽歌があるが（当時のパンデミックもやがて終息したようだが）、そして、パンデミックに次いで、ロシアによるウクライナへの侵略戦争が始まったのだが、万葉集の最終歌「いや重け吉事」をもって、現代に甦った家持が、パンデミックが終息し戦争のないよき世になるよう「いや重け吉事」、つまり、「幸多かれ」と世界に向けメッセージを發する、そんな舞台を制作したいし、制作したかった。

気まぐれな神様がまた気まぐれを起こして、新たなエンディングを用意してくれて、家持とともに再び甦ることができるのか。でも、やはり、多くの人々に迷惑をかけた前科者は、再び舞台に関わるべきではない、と、なおも思い惑う、まだこの頃である。

「這ってでも付き合うよ」と言ってくれた闘病中の先輩の訃報が届いた。亡くなったのは、もし公演が実現していたらその楽日となる 20 年 8 月 15 日、その日だった。慌て者の先輩のことだから、公演が中止になったことを忘れて、神戸から浅草まで這ってきて浅草公会堂にたどり着いたところで力尽きたのだろうか。これも、思いがけない偶然だった。先輩、ありがとう。

そして、もう 1 つの舞台のことも忘れるわけにはいかない。多摩平和まつりの市民劇「童連」の物語である。この舞台も例にもれず、コロナ禍のため 2021 年の公演は中止となり、翌年に持ち越した公演も中止となった。今後の状況次第では、上演が見送りになり企画そのものが宙に浮きそうな気配もある。そこで、一度は振り払った前科者の芝居心が性懲りもなく、またムクムクと湧いてくるのである。よそ様ができなくなるのなら、本家本元の私たち、甲府組が企画を引き取って、地元甲府で公演を打つのである。2022 年は、戦後童連ができてから、75 年という節目の年を迎える。「童連～75 年目のかおる花束」という仮のタイトルまで決めたが、果たして、前科者が関わっていいものだろうか。これもまた、気まぐれな舞台の神のみぞ知る。というところで、やはり神頼みで舞台に取り組むのは、これまでの失敗の蒸し返し、無茶以外の何物でもないということで、第 3 幕の幕を下ろし一連の物語は終わったのである。

(幕下りる)

#### 幕間

文芸誌『文芸』を発行している日本作家クラブの総会の会場神田明神の一画に、1 回 200 円入れると、人形の獅子舞がお札お札を持ってきてくれる自動おみくじ機がある。鳥取公演の前に、それを引いたところ、1 発目で「大吉」のお札が出た。この手のおみくじの場合、そのほとんどのお札が「大吉」だろうとは思ったが、ありがたいこと。みんなの士気を高めるため、公演前夜、スタッフ、キャストが集まった時大吉のお札を披露したところ、みんなも喜んでくれた。そして、そのお札を「言霊の精霊」を演ずる浪曲師奈々福さんに預けた。奈々福さんは丁寧に折りたたんで、それを帯に挟んだ。鳥取公演はお札が占ってくれた通り、「大吉」の神さまが舞台に降りてきてくれて大成功だった。

翌年の作家クラブ総会の折、今度は東京公演を占ってもらおうと、自動おみくじ機に、100 円玉 2 枚を入れた。出てきたお札は「末吉」だった。「末吉」でも悪くはないが、次は「大吉」が出るだろうと、高をくっってもう一度 100 円玉を入れた。また「末吉」だった。そして、もう 1 度さらに 1 度と 7 回ほど繰り返した。その内の最高が「中吉」までで、とうとう「大吉」が出ることはなかった。お札の 1 つに「甘く見ると手遅れになります」と書かれてもいた。



ということで、神田明神のお告げから東京公演に暗雲が漂い始めたわけだ。そして、その通り公演は中止に追い込まれたが、そのおかげでコロナ禍を逃れえた、つまり「末吉」が見事に当たっていたことになる。神田明神は舞台の神様と LINE で連絡を取り合って事前告知してくれたのだろうか。3 年前に幕が上がる前から「面白くなりそうだから……」と、先を読んで原稿を依頼してくれた『文芸』藤橋編集人も、その LINE つながりだったのかも。

そして、そんな 3 幕ものの舞台として振りかえてみると、もう 1 つ何か予想もしなかった「末吉」が控えているのではないかという、なぜか、そんな予感がしてきたのだが……単なる気のせいだろうか？

#### 第 4 幕へ

2021 年 11 月発行の『文芸』に連載した 3 回目の「わが体験的万葉集物語」はまるで波乱万丈、3 幕ものの舞台劇のような話としてまとめ、前述したようにそれで幕を下ろしたつもりだった。ところが再び幕を上げて 4 幕目を始めたいという思いがムラムラと湧いてきたのである。もしかしたら、もう 1 つの「末吉」、つまり最後の幸運が待っていてくれるのかも……これまで私、この手のおみくじとか占い、或いは神仏にすぎるとい世界とは全く無縁だった。どちらかというと、合理的、無機的な心性の持ち主で、そもそも神頼みという発想はなかったのだが、今回舞台に取り組み始めるようになって変わった。本稿でも、最初から「舞台に神さまが降りてくる」とか、「舞台には神さまと魔物が同棲している」などと当たり前のように平気で書き、実際おみくじまで引いた。そう言えば古来神社と演劇は縁が深いとされている。私たちはそこまではできなかったが、舞台の脇には神棚があってお芝居の前にはその前で興行の成功を祈願すると聞く。新宿花園神社は古くから境内に劇場を設け演劇などの興行を行い、社殿の再建を果たしてきたという。その境内の片隅には芸能浅間神社がまつられている。興行の世界では「人事を尽くして天命を待つ」というのか、最後は舞台の神さまにおすがりするしかない、という側面は確かにある。第 4 幕は、そんな舞台の神さまの気まぐれ次第という後日談として、新たな動きの一部を報告する。

それはつい先ほど書いた甲府の児童劇団「童連」である。3 幕の終わりにこう書いた。

<一度は振り払った前科者の芝居心が性懲りもなく、またムクムクと湧いてくるのである。(略) これもまた気まぐれな舞台の神のみぞ知る>

ところが、その「気まぐれな神さま」が動き出したのである。その神さまの正体はしばらく伏せておすが、ある神

さまに促されて「一度は振り払った前科者の芝居心が性懲りもなく、またムクムクと湧いて」きて、仮のタイトルだけ決めていた舞台の脚本作りに着手したのである。そして、それを悪戦苦闘しながら仕上げたのである。タイトルは、「75年目のかおる花束～はばたけ子供たち」。コロナ禍のため2回にわたって公演中止となった多摩平和まつりの平和劇担当の林氏との共同脚本で、童連のふるさと甲府を舞台に、昭和22年に行われた初公演から75年という節目の年を迎えた記念にまとめ上げたのである。本来なら記念事業として公演の形で実施したいところだが、このコロナ禍もあり、やはり前科を思い出しては無理無理と思ひ返し、脚本として残すことでその1つの記録としたものである。林氏の原案があったおかげで予想以上に面白い作品に仕上がったのだが、この中にも、当然のごとく軍歌「海ゆかば」が登場する。この舞台の新たな主役に設定したのが、童連のお嬢さん先生こと、小学校の若い女性教師なのだが、実際その先生も師範学校の卒業式で歌わされたのがこの軍歌だった。つまり、卒業式の別れの歌として練習していた「相思樹」の歌が、「海ゆかば」に代えさせられた「ひめゆりの乙女たち」とまったく同じケースだったのである。また米軍の空襲で焼野原となった甲府の街を、少年が彷徨いながらつづやくように鎮魂歌のように歌う歌がこの「海ゆかば」だったというシーンも入れた。つまり、万葉と沖縄とそして甲府、この3つの舞台が「海ゆかば」で結ばれたのである。

そして、この主役のお嬢さん先生が、実は私の小学校3年から6年までの恩師だったのである。先生には時々電話をして話を聞いたり、手紙のやり取りで童連の思い出なども取材していたのだが、先生からは、小さな達筆の字で宛名のところまでビッチリ書きこんだ美しい絵葉書を送っていただいた。それが積み積み約90通。それを手元に置いて脚本を書き進めたのだが、それが物語の展開の役に立ったことは言うまでもない。

いずれにしても、今回はこの脚本を舞台の神さまとは別のもう1人の神さまにいったんお預けした。神田明神の何枚かの「末吉」という強い味方もついているので、もしかしたら、もう1つ、別の「結」が待っているのかもしれない。

この「万葉集ナウ」、次回をもって最終回の予定にしていたが、前科者のその後の物語についても報告したく、次回最終回として予定していた「終わりに」は、「中締め」に変更することとしたいと書いていたところ、1通の嬉しいメールが入った。発信は阿川淳之氏である。その文面は、「本日高岡の万葉歴史館坂本館長宛に大浜さんと中島光風先生の書簡や著作などを送付いたしましたのでお知らせいたします。実家を片付けていたら色々出て来ましたので、結構な量になりました」。

以前、作家阿川弘之氏の親友で名著『万葉幻視考』を残した大浜巖比古氏とその2人の恩師でヒロシマで被爆死した万葉学者の中島光風氏のことについて紹介した。その際阿川氏の3男淳之氏から、たまたまご両親の家の整理をしていたら、両先生の手紙類が出てきたのでいずれ送る、という連絡をいただいたことがあった。そこで大浜氏の愛弟子でもあった高岡万葉歴史館の坂本信幸館長に連絡したところ、「資料的価値が高いので、是非当館で保存させてほしい」ということで、整理がついたら同館に寄託することになっていた。いずれ当サイトでもその一部を紹介させていただきたく、そのためもあって、本サイトは次回で「終わりに」ではなく、次回をもっていったん「中締め」とし、改めて後日報告できることを楽しみにしている次第である。

